新しい老年文化創出のための老人のイメージ比較

○　ホソ大学校老人福祉学科　Park, Hyunsik
Rhee Ok-Jin（ソウル大学校社会福祉研究所）

キーワード:老年文化、成功的老後、新しい老年文化

１．研 究 目 的

新しい老年(New aging)は、時代的、年代的特性を背景に、既存の老年世代とは違って能動的かつ独立的な役割を付与された世代である。老年の肯定的な側面に焦点を当てた新しい老年（New Aging）は、「喪失と低下」に焦点を当て「依存的な時期としての老年」への否定的固定観念に一助してきた既存の老年に対抗し、老年の潜在的開発と問題予防を強調することによって老年の生活の質向上に寄与するために再構成された。新老年は、老年への既存の否定的な偏見や年齢差別、老人疎外などの問題に対する解決を担保に、高齢化社会の脈略で老年をどのように過ごすかに対する重要な指針となる。老年への新しいアプローチとしての新老年アプローチは、活動的老化、成功的老化、生産的老化に表現され、各々の概念は理論と政策、文化、専門的実践などを通して望ましい老年に対する基準を提示してきた。新老年は、西欧福祉国家の発展と年金制度など、社会経済的脈略の中で発展してきた。新老年政策の登場は、老年パラダイムの根本的な変化というより経済的必要性による表面的な転換である。新老年の問題は、積極的に促進しようとする労働をはじめ類似労働活動は、後期産業社会の老年を資本化し、社会的必要によって老人を排除するか、参与させる社会的治療策としてみなされる。老人の実際ニーズと存在的価値を経済的価値としてみなす視点によって老年政策が本質的に老人と老年期への尊重と統合を志向するとはみにくく特に老人への否定的な認識の根幹を成してきた依存という老年の問題は、存在的な価値としての老人が排除され、老人の集団的ニーズや主体的な意見が反映されていない点で今なお、老人は老人福祉政策の受動的対象集団として存在するのみである。新老年として命名されるベビーブーム世代の老後問題は、成功的老化と生産的老化が等値されることで生まれる最も大きな問題は､老年期の成功是非を経済的な生産性を基準に判断する。生産性の意味が経済的な生産性に集中されたことによって貨幣価値を創出する有給労働や社会的に経済的な利益をもたらす活動に従事することを成功的老化とみななすようにする。老人の社会的問題は、新老年と旧老年に対比させ、平凡な老人と特別な老人、活動的な老人と非活動的な老人、生産的老人と負担としての老人という二分法的なイメージが対比されることによって老年期の成功と失敗が左右される。

活動的で成功的な老人のイメージを一方的に強調することによって社会的な資源が必要でない存在としての老人のイメージを年齢増加によって自然に増加する老人の実質的ニーズへの政策的な関心を減少させる。これは「老人全体への偏見を老人内部の特定弱者集団への偏見に代替」という新しい差別を生んでいる。生産的老化自体を目標の概念としてよりは手段的概念として理解し、経済的論理が支配する論理よりは現在の老人の生活の価値と質を保障できる新老年文化の認識転換が必要である。韓国は、年金開示年齢と退職年齢が同一な外国と異なり、定年年齢が原著に低いだけでなく、定年まで安定的な雇用が保障されず、年金制度が未成熟な韓国で老人の生産的役割を相扶させる政策は、老人人口の主変化を加速化させるだけである。そこで、本研究では老人の意見と経験に基づいて新老年文化創出のための老人イメージを分析することを試みる。

２．研究の視点および方法

老年世代と老人世代間の老人イメージと引退後の施設利用意思を比較し、新老年文化形成の基礎資料として活用するために行った。調査対象は、忠南地域の 1964 年以前出生者で年齢別・性別に平準に表出されるように設計し調査した。時期は 2013 年 10 月 20 日から 12 月 20 日(約 2 か月)までである。忠南市・郡地域の邑・面・洞に平準に配布し、都心と農漁村地域特性が表出されるように措置した。全部で 2000 部配布し、その内 1048 部が回収された中から 1037 部を分析に活用した。

３．倫理的配慮

本調査対象者に事前に説明を行い、調査時に人権侵害が起きないように努めた。

４．研 究 結 果

老人というと浮かぶイメージに対し、肯定的・否定的なイメージを調査した結果、全般的に肯定的なイメージ（平均 2.79 点）より否定的なイメージ（平均 2.87 点）が高かった。肯定的イメージでは「賢明（2.93）」が最も高く「独立的（2.62）」が最も低かった。結局、老人の敬倫に対し肯定的な立場であったが、経済的な側面に対し否定的な印象を持つと解釈できる。また、否定的イメージは経済的に「依存的（3.08）」が最も高く「悲観的（2.69）」は低いことからやはり経済的な側面への認識が否定的であった。

老人への肯定的なイメージに対する世代間違いを比較した結果、全般的に老人世代がベビーブーム世代よりは肯定的な自我概念を形成していると分析された。老人への肯定的なイメージに対する世代間違いを比較した結果、「老衰」「悲観的」というイメージは二世代間統計的に有意味な差がみられなかった。しかし、「独断的」というイメージはベビーブーム世代がより高く認識していた反面（$p<0.001$）、「経済的に依存的」と言いう意見は老年世代がより高く表れた（$p<0.001$）。引退後、主に利用する意思がある余暇施設に対し複数回答して頂いた結果、「敬老堂（30.4%）」が最も多く、「老人福祉会館（29.2%）」、「文化センター（17.2%）」の順になっていた。しかし、「博物館や美術館など（0.6%）」「大学・生涯教育院（4.1%）」は相対的に低かった。引退後、利用施設に対する世代間違いをみると新老年世代は「文化センター（25.3%）」「老人福祉会館（15.7%）」「同好会（15.2%）」準であったが、旧老年世代は「敬老堂（42.8%）」「老人福祉会館（38.8%）」順になっていた。老年世代の引退後、利用余暇施設は 2 つの施設に集中されていた反面、新老年世代は平準に分布されている特徴がみられた。今後、引退後の利用施設に対し、政府施策においてベビーブーム世代の多元的特性を充分に反映し、多様な施設拡充とアプローチ方法が考慮されるべきである。特に、「敬老堂」の利用意思が非常に低いことを考慮すべきである。

５．考 察

老人は、老年期の特殊性、老年期だけの資産、老年期の経験を省察し、意味を付与するよりは「中年の延長」としての老年を強調する。老人を同等に待遇するよりは老人を中年と同じような能力を持っているとみなし、他人口集団と同じく扱うため、年を追うにつれ増加せざるを得ない老年期の身体的、社会的ニーズを否定するようにさせている。これは結局、年齢増加に伴う障害と依存、究極的には死を否定する新たな年齢差別主義を生み出すかもしれないという批判にも直接される（Holsrein & Minkler, 2003）。新老人と旧老人の構図に相応する老年の幸福・不幸は個人の努力次第によるものとみなされる。新老年もやはりこのような対立的な分離構図の中で新老人の生産的かつ自立的な生活をより正当化させ、旧老人に該当する老人を「不誠実」で「怠け者」という避難と共に他者化する。また、疾病や障害を抱えていること、さらには老いさえ個人の失敗とみなす認識は結果的に個々人が「若さ」を保ち、「老けないように」究極的には自己破壊的な戦略を強化させることにもなりかねない。このような個人レベルの戦略が社会的レベルのビジョンになると、結局多くの老人を周辺化させることにつながる（Holstein & Minkler, 2003)。

高齢社会の理想的な老人像は他人に依存せず、自ら独立的に生きていく老人でそのためには、若いうちから徹底した計画と準備があるべきである。すなわち経済、健康、余暇などすべての領域において「成功的な」老年は個人がどれくらい努力し、徹底に準備するかによるということである。

従って、老人集団をまた排除させるよりは一人の人間の人生の中での連続的な過程で、共同体の生活の中に混在されるものと認識するところから新老年文化の概念化と老人余暇福祉施設の機能的転換が必要となる。